



晴夜 (6) | 1

柴田 佐知子

おほかたは雨滴に籠る犬ふぐり

攻めてくるものは海より大北風

声あげて急流過ぎし雛もあり

瀬にのりて女雛は男雛抜き去りし

真夜中や枕のなかを雛流れ

流れつく海底に雛あまた立つ

—「俳句朝日」五月号より—

母老いて霞の通ふ体なり

水の端ばかりを蝌蚪の押し合へり

更に踏む肋も失せしキリストを

迷路

高倉和子

さくらさくら溺れて鬼となりぬしか

振り返る闇恐ろしき花の夜

稜線を崩して桜満ちてをり

花疲れ匂ひ失せたる思ひあり

抜け道のいつか迷路に春の夜

生菓子音を音なく切りて春憂ひ



思ひ出す顔は同じよあたたかし

猫の子を抱き無防備となつてをり

床下の土の湿りや目借時

芍薬の大きく揺るる母郷かな

雨の筋残る石仏麦の秋

つぎつぎと雲の現れたる泉かな

もうどこも行かぬと決めし墓

水無月や白にも不穩ありたるを

噴水の空をはなるとき太し

今年の博多どんたくもまた雨に始まった。地元の人たちはいつものことと平ば達観しているようにも思える。あの延々と続くパレードが雨に打たれるより、やはり降り注ぐ太陽の下を行く姿を見たいものだ。

私の住む家はパレード出発点に割りと近いせいもあつて窓を開けていると音楽とともにしゃもじの音がかすかに聞こえてくる。不思議なものでその音を聞いているとだんだん落ち着かなくなってくる。しかし、今年の雨は激しく、しゃもじの音も音楽も打ち消されてしまい私の部屋まで届かず、さみしい祭りの始まりとなつた。

金魚

中田みなみ

足音を行かせジャスマミンひとり占め

葉桜にけだるき返事聞えけり

考への深みに嬰粟のはじけたり

薔薇匂ふFIRST・LOVEと札垂れて

剪り口を鮮しくして夜の薔薇

薄暑かなやつとほどけし紐やつれ



先日テレビの「徹子の部屋」を視ていると、テニス界の松岡修造氏が電車の中で化粧している女性を見る度に注意すると言っておられた。私も同性として見るに耐え兼ねて三度に一度は苦言を呈してしまう。中にはジロリと私を睨んで止める人も居て、家人が今に殺されるかも、と脅すので、下車してエスカレーターに乗る時はい振り返るのだが、注意出来る年齢になったのも利点だと思ふ。

付き合ひも兼ねし茅の輪をくぐりけり

詣で道金魚掬ひのこつを聞く

恐るおそる置きたる金魚袋かな

金魚鉢憂きことをまた増やしたり

湯を沸す金魚の無事を確かめて

ネクタイをはづして覗く金魚鉢

穴掘りて頭の重くなる夏の昼

かはほりや病氣見舞の梯子して

告白にストロー離すソーダ水

先年こんな事があった。私鉄のシルバースーツに席を占めた三十才位の二人の女性のうちの一人が化粧し始めた。基礎からである。私はだんだん耐えられなくなり、「お嬢さん！W杯予選も近づいて、外国人が増えて来ましたね。ヨーロッパでは人前でお化粧するのは、客を探している商売女なのよ。お嬢さんのような素適な（大嘘）方が誤解されるといけませんもの、車中でのお化粧は止めましょうね」すると彼女「アーラ驚いた。注意されたの初めてだわ」でも手は休めず斯うのたもうた。「おばさん、もう片方マスカラ付けないと半端になるから、一寸待っていてね」彼女の調子につられて「ウン」と頷いてしまった。

全く苦笑ものである。東京から日本を変えると言われる石原さん！何かの折に車中の化粧と、女学生のもうにも短いスカートのを話題に挟んで下さいませんか。

青
芝

高 千夏子

さくらさくら丑三つ時を蒼く散る

満願の朱印しばらく亀の鳴く

涅槃図の歎歎の呼びたる雨ならむ

花筏鯉の頭模糊と動きたり

春宵を秋の國より來し人と

使徒のごと自販機並ぶおぼろかな



ブルークラスというアメリカの民族音楽がある。ケンタッキーの山岳地帯から一九四十年代に派生したカントリーミュージックで、ウッドベース、ギター、五弦バンジョー、フラットマンドリン、それにフィドルと呼ばれるバイオリンを演奏しつつ、大体四人組くらいで合唱する。リードヴォーカルは男性的、ハイテナーは大変な高音の裏声で唄い、鄙びた味わいと男臭さが漂う。演奏者の出身が、木こりや、農民が多い故もあるだろう。日本では一時期、C & Wと共に大学生の間で特に好まれた。私の学生時代はフォークソング全盛期だったが、それに飽き足らない連中にブルークラスは魅力的であり、学生バンドが幾つかあった。彼らは学園のヒーローであった。

いつまでも昏れぬさみしさ残り鴨

虞美人草高級な麵麴顎疲れ

莖立ちて老師法話か放言か

えこの花主治醫を訪ふは戀に似て

秩父往還たかなの頭を踏みて

柿若葉佛飯の下げ母が食ふ

銅像に音叉を打ちぬ聖五月

心ゆくまでギター調弦青芝に

くるくると団扇まはして向島

私の片思いの相手は、学園随一の演奏者で美声であった。無口で、酒飲みで矢鱈にもてた。我が愚弟は、学校は違ったがベース演奏に借り出され、我が家にも彼氏は良く来たが、私には眼も呉れなかった。私は、ブルグラスのレコードを沢山集め、彼の世界に少しでも近づこうと聞きまくった。お陰でブルグラスの魅力の本質が何であるか判った。放浪、母恋、悲恋、労働、故郷鑽仰、そして宗教心が主なテーマ。どんな音楽か判らない方は、邦題「俺たちに明日はない」というウオーレン・ビーディとフエイ・ダナウェイ主演の映画の中で、盛んに挿入されていた「フォギーマウンテン・ブレイクダウン」という曲を思い出して頂くと判ると思う。後年俳句を始めるようになって、すぐ俳句形式の虜になったのは、どこかブルグラスの世界と一致するものがあったからと今でも思う。

ところで、彼氏は姉貴を好いていたが俺が妨害したと後年愚弟から聞いた。遅かりし。

祈らむと

荒井千佐代

聖堂の横に舟着く朝ざくら

素手をもて払ふ舳先の涅槃雪

祈らむと膝折れば瑠璃いぬふぐり

ねんねこもゐて教会の畳の間

保育所を桃の蕾の囲みけり

鈍色に湾の満ちゐる雲雀東風



「空」4号の拙文をお読み戴いた高千夏子さんから、次の様なお便りが届きました。

『御主人様の御実家についての御文章、とても興味深く拝読しました。川越市喜多町には「白露」同人、毛呂刀太郎氏（本名、山田道明）がお住まいです。友岡子郷氏の次に「雲母選賞」を受けられ

潮鳴りの渡り廊下や大試験

屈強の吾子と見る野火猛りけり

亡き父母に蕪とろけるほど煮たり

父の遺品おほかた夫へ杏咲く

踏青や亡母の帽子を深くかぶり

みどりごのひつぱるしだれ桜かな

青空へ卒園の児ら差し上ぐる

耳奥に己が血の音蝶の昼

ハライツにちちはは姉や桐の花

た方で、旧知の方です。「威造り」にお住まいです。川越は「町勘」マチカンさんに、包丁を研いでもらいにも時々行きます。』

いつか姉が「山田さんは俳句をする方で、TVにも出演された事がある」と、話していたのを思い出しました。その山田さんだとすると、大通りを隔てた斜向い辺りのお宅。感激して、高さんにお電話しました。その後、高さんの橋渡しで毛呂刀太郎氏と初めて言葉を交しました。翌日早速（約束の『系図』もまだお届けできないうちに）毛呂氏は、夫の実家を訪ねて下さったそうです。

その夜、姉から「いいことで人が訪ねてくれるって幸せなこと」と、電話がありました。

遠くに住み、御無沙汰ばかりの私からの、ささやかなプレゼントになったでしょうか。

高さん、色々とお心遣い戴き、ありがとうございました。マチカンさんへのついでに、喜多町にもお運び下さいませ。